

【中学校 作文 優秀賞】

平和

沖繩尚学高等学校附属中学校 二年

福山 芽 祝

どこまでも続く蒼い空、澄み渡る青い海。ギラギラと照りつける太陽は肌を射して痛い。水平線に続く波が銀色に輝き白波ができては消える。思い切り吸いこむ空気は冷たくて潮の香りで少ししょっぱい。私が小学五、六年を過ごした慶留間島は美しい空気に包まれている。

スーパーが無いこの島での私達の生活は、本島に買い出しに行ったり、食料品を本島まで注文して船で届けて貰ったりしていた。島の人達は、そんな私達に自分の畑で作った野菜を分けて下さった。

五月に台風が来た時は野菜の収穫はわずかだった。自分達の食べる野菜にも困る中、小さく育ったゴーヤーを分けて下さった島のおじいさん。私達は、そのおじいさんの家によく招かれた。

「あい、よく来たね。いらつしやい。今日は芋てんぶら作ったよ。貝もいっぱい採れたから食べなさい。」

おじいさんの優しく笑う目はいつも温かい。そんなある日のこと。

「昔のゲルマ島はカツオ漁が盛んだったよ。カツオ節工場もあってとつてもにぎわっていたさあ。でも、戦争が起こって一変した。このゲルマ島にも日本軍の兵隊さんが来たよ。『マルレ』という爆弾を爆発させて、生きて帰れない死のボートを作る朝鮮人の軍夫もいたよ。朝鮮の人はとつても優しくなかったさあ。ゲルマ島にアメリカ軍が上陸したら、島みんなはウタキのある山の野原に集まったさあ。」おじいさんの優しい目が下をむいて私と目が合わなくなった。

「私は、自分のお姉さんとお母さんを首をしめて殺した。戦争になったら男は八つ裂きにされて、女はムゴイ殺され方をすると聞かされていたよ。だから、姉さんは『アメリカ軍に殺される前に早く殺して、早く殺して。』と何度も言った。持っていたヒモを姉さんの首に巻いて、思い切り引っ張った。お母さんは、姉さんが死ぬのを見守って、今度は自分の番だと首にヒモを巻いた。私はそのヒモを思い切り引っ張った。生き残っていたみんなもお互いの首にヒモを巻いて引っ張った。気がついたら周りの人は死んでい

た。全員が大きな木にぶら下がって首をくくっている家族もいた。だけど、私は死ねなかった。私は姉さんとお母さんを殺した。」

おじいさんは目を閉じて静かに言った。

私は恐くてその場から逃げたかった。とにかく恐くて怖しくて体が震えた。おじいさんと目を合わせるのが恐かった。おじいさんは仏壇の奥から一枚の写真を出した。セピア色の写真の中央にりりしく笑うおじいさんのお姉さんがいた。

「まん中のが姉さんだ。優しく、きれいな姉さんだった。」

おじいさんは自慢げに言った。

しばらく経って、私はおじいさんの話を恐がったことに「ごめんなさい。」と謝っていた。おじいさんはどんな想いで戦争の話をしてくれたのか、どんなに辛くて悲しくて切ない想いで生きてきたのか。何度、お母さんやお姉さんの写真を手に取って会いたいと思ったのだろうか。

自分達の食べる野菜がわずかなのに私達に野菜を分けて下さった優しいおじいさん、優しい島の人達を追い込んだ死、戦争が怖いと思った。

昔、戦争があつたことは知っている。ゲルマ島の美しい風景の中に不気味に残る鉄のかたまりがある。戦争の名残りだ。でも、戦争で奪われた尊い命のことは知らない。失われた命、一つ一つにお父さんお母さんが必ずいて、妹、弟がいる。尊い命が誕生した時、どれだけの人が幸せに包まれただろう。沢山の人の愛情を受けて大人になるまで成長した。その命が奪われた時、どれだけの人が悲しみ、苦しんだのだろう。

戦争は、そんなこと関係ないとあざ笑う。戦争が大嫌いだ。

おじいさんが作つた切り干し大根を母が煮物にした。私達が本島に戻った時に、

「食べなさいね。」

と渡してくれた切り干し大根。

あの戦争から六十四年経った今。私達は幸せに暮らしている。この幸せで平和な暮らしは、何の努力もせずにあるのだろうか。いや、違う。戦争を体験した人達やおじいさんの悲しみ、痛み、戦争で命を奪われた人達の心の叫びが、私達の平和を作っている。

私は現実起こった戦争を忘れない。平和は誰かが守ってくれるものではなくて、自分達の手で作る、守り、受け継いでいくから平和なのだ。誰かが作るのではなく、自分達で作っていくのだ。